

俳句美術館 第1回公募作品展

あなたの俳句をアートにしま賞

審査員の紹介

小西昭夫

子規新報編集長・愛媛新聞俳壇選者。著書に『花綵列島』『ペリカんと駱駝』『小西昭夫句集』等

松本勇二

愛媛県現代俳句協会会長
海程同人・吟遊同人

八木 健

俳句美術館創立名誉館長
滑稽俳句協会会長
八木健のCATV俳句主宰

受賞者の発表

大賞



靴底をはみだしたがる春の土

山本 賜

【講評】 風景としては靴底に土がついたということだろうが「土」を擬人化することで「春の訪れを喜ぶ」作者の気持が出て、生き生きとした句になった。「はみだしたがる」は幾たびか土を削ぎ落したのにとということだろう。

特選



ででむしに傾いてゐる地軸かな
工藤泰子

【講評】

殻の渦巻きの中心に地軸が突き刺さる。ででむしが傾けば地軸も傾くわけだが、ででむしは地軸のことなど考えもしないから、地軸を振りまわしつつ移動するのである。虫が地球を振りまわすのが可笑的い。



をちこちに小さい秋が落ちてゐる
小林英昭

【講評】

サトウハチロー作詞の「小さい秋見つけた」をベースにした本歌どりの句である。「をちこち」は遠近と書くもので、風景の広がりも感じられる写生句でもある。「をちこち」は堅い表現で、木の実を連想させもする。



その色は闇のものとも黒葡萄
高橋素子

【講評】

俳句は対象を凝視することから生まれるものである。作者は黒葡萄の「黒」に色の深さと味の濃さを感じたのだが、その魅力をどう表現したらよいか悩んだ。そしてたどり着いたのが「漆黒の闇」だったのである。



山吹の咲くころ重しランドセル
鶴崎 孝

【講評】

体験を描いてリアリティー十分の句に。入学の時点では、嬉しさと緊張感でランドセルの重さなど苦にならぬのだが、二三か月すると教材も増えてランドセルの重量が増すのである。山吹を使って華やかさが出た。



思い出す母の作った柏餅
門屋 定

【講評】
 作者は「柏もち」を手にとって食べようとしているのだろう。柏餅は日常的には食べる機会は少ないだけに作者は幼い頃に食べた柏餅を思い出したのだ。母の手づくり柏餅の味を。思い出したのは柏餅だけではない。



帰省して坐る亡父の指定席
小林 英昭

【講評】
 帰省して亡父の座だったところに、一家の長男として座すのだ。そのことの重みが作者にずしりと感じられるのである。帰省という一見して楽しい季語がその季語の置かれた状況で重みのあるものになるのである。



新入生カバンに熊のぬひぐるみ
鶴崎 孝

【講評】
 熊に拘る新一年生を描いて面白い。「なんでもない」ことを描いて、作者と新入生の関係も推測できる。この餅一年生は決して安易な妥協はしない。そこが作者は「楽しく嬉しい」のである。軽く描いて佳句となった。



ふすま絵の椿の中に迷ひ込み
新田 真理子

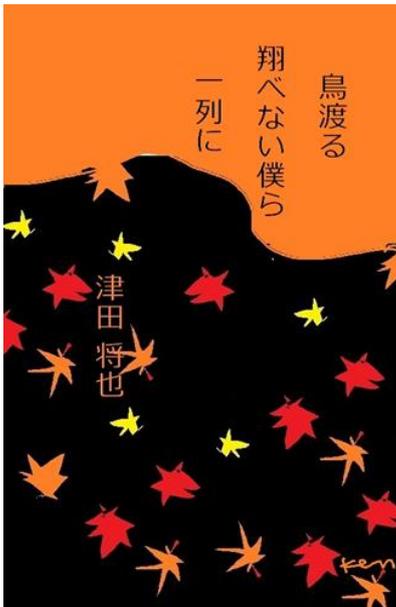
【講評】
 椿は華やかに描かれていて季節感十分。作者はそのふすま絵に魅せられてしまった。華麗だとも散りばめられた椿のバックにある闇の深さについても語られてはいないが、迷い込むを書いて椿の礼賛に成功している。



隅が好きすみれが好きでいいおとな
山本 賜

【講評】
 「す」で巧みに韻を踏んでいる。句では作者が「すみれが好き」だということを言っているが一方で、「いいおとなが」と揶揄しているように見える。逆説的表現で「詩人はこのよにあらねば」と確信しているようだ。

小西昭夫賞



鳥渡る翔べない僕ら一列に
津田将也

【講評】

川や池のほとりだろうか。それとも水溜まりだろうか。いろいろな色の落葉が浮かんでいる。この地上の景色に鳥渡るという空の様子を対比させたことで大きな世界が生まれた。見事なコラボレーションである。(小西昭夫)

松本勇二賞



母の忌や小鳥のように葡萄食ぶ
津田将也

【講評】

母親の忌日に葡萄を食べたのである。手に取らず直接食べる仕草を、小鳥のようにと喩えることで詩になった。忌日俳句はどうしてもウエットになりがちだがさらっと書けた。母への思慕を仄かにうかがわせる好句。(松本勇二)

八木健賞



撮るたびに紅褪せる桜かな
鶴崎 孝

【講評】

撮るたびに色が褪せるなどあり得ない。と批判されようが個人的に感じたことだから構わないのである。本来詩は非科学的なものである。極めて個人的な心の記録である。感じたことを素直に書いて秀句となった。(八木 健)